の所謂和解の論理なるものは、著者のいふところの義認とは少しく意味を異にするものではなからうか、著者の教示を待つものである。(菊判七四六頁、東京目黒書店發行、定價六〇〇)　(柴田)

○明治前期財政經濟史料集成　第十五卷

大藏省編

近時歷史學界に於て、種々なる立場からなされる教說的論講の多き中に、史料原典の上梓が續々企てられるのは殊に喜ばしき事としなければならぬ。その一である本集成は、去る昭和六年より大內兵衞、土屋喬雄兩氏の校正によりて刊行され始めてから既に豫定の大半を公にし、明治初年の社會經濟史的分野に最も基礎的な根柢的な寄與をなして來たのであるが、最近第十八回配本として第十五卷會社全書(上)が公刊された。

會社全書とはその解題に明らかであるが、維新當初我國が歐米先進諸國に伍せんが爲め、あらゆる產業部門に於て急速に資本主義化し近代化する必要に迫られ、新政府の保護誘掖を蒙つて組織された各種の機關の內、明治二年通商司の監督下に創設された爲替會社に關する記錄の一大集積である。卽ち爲替會社は政府が特別なる保護指導の下に三井小野島田その他の富豪を慫慂して組織せしめた我國最初の株式會社であり發券銀行の先驅者である。假令數年ならずして失敗に歸し、その實績は揚がらなかつたとはいへ、明治初年の會社企業として、金融機關として、我國資本主義發達史上に占める地步は極めて大である。

本書はこの爲替會社に就いて明治二年の創立より廢止に至り明治九年金券引換の事務完了する迄の、回議書、報告書、日誌、勘定書並に各府縣との往復文書等、一切の文書記錄を網羅して居り、原本は嘗て大藏省文庫に收められしが、大正の大震災にて烏有に歸し、唯幸に三井家にその寫本を藏せるによりて印行せるもので、その絕大なる資料的價値がやがて更に歷史的價値に昂められる事を望むのである。

殊に本書は、その原本の構成が、約三回に亙る追錄の

爲め、檢索上多大の不便を伴ひしを、一般の利用に便せんとして編次に於て多大の改變が加へられてゐるのは、校訂者兩氏にその努力を深く謝せねばならぬ所であら う。（菊判四九一頁改造社發行、定價四圓）

○元寇史料集
○唯一神道名法要集

國民精神文化研究所

國民精神文化研究所は開所以來諸種の出版物を以つて普く國民精神の涵養に資して來てゐるが、今回また「國民精神文化文獻」の第二、第三として「元寇史料集」及び「唯一神道名法要集」と題する稀覯の史料の複製版が刊行された。

元寇史料集は卷子本二卷、同所々員西田直二郎博士指導の下に、同助手吉田三郎氏主として事に當り完成せるもの。第一卷には京都正傳寺所藏の文永七年五月及び文永八年九月の宏覺禪師祈願開白文、石清水八幡宮司田中俊清氏所藏文書二通を收めてゐる。前者は文永十一年最初の來寇以前、蒙古が高麗を通じて非禮なる文辭を以て我國に好を求めし時、朝廷に於いては和親の返牒を遣はさるゝに非ずやとの巷說行はれ、正傳寺の開山宏覺禪師卽ち東巖慧安・これを聞いて石清水八幡大菩薩の寶前に敵國降伏を祈り、返牒の止められん事を禱りし願文であつて、彼の烈々たる憂國の氣慨を留めてゐる。後者は文永の役後、幕府は更に進んで外征を企て、建治二年鎭西奉行大友賴泰は管內の將士に令して準備を進めし時、それらの將士より奉れる請文であつて、田中俊清氏所藏の「八幡筥崎宮御神寶記」の紙背に殘れる「北山室地頭尼眞阿請文」及び「井芹秀重注進狀」の二通を載せてゐる。而してその內容に依つて、當時老若男女の別なく國難に殉ぜんとせし國民的氣慨を察知する事が出來る。

第二卷は京都帝國大學國史研究室に藏する壬生官務家日記抄の複刻である。卽ち弘安四年再度の來寇の際、奮戰防禦に努めし九州の狀況と、その戰報に一喜一憂せし京都の情勢を記せるもので弘安四年五月より八月に亘つてゐる。

本書は從來とても斯界の注意に上り、屢〻引用せられし箇所もあるが、未だ全文の紹介されし事なく、今こゝに原本の面影を偲ばしむると共に、解說に於て難澁の字句を讀下されしは今後の研究に一歩を進めるであらう。

解說に就いて見るに、本書の原本は當時の左大史たる小槻顯衡の日記と推定されるが、現存の古寫本は紙背文書等勘考の結果、顯衡四世の孫兼治が書寫せるものと信ぜられ、兼治は足利義滿の時代に活躍せる經歷に徵して應永二十二年の外寇切迫せる頃、外交上の必要から作られたとの臆測もなし得ると誌されてゐるのは頗る興味深き事である。元寇史料集が、元寇の當時國家的思想の興隆せる事を、現時「日本」なる觀念の熾烈になりつゝある時に反省し「現時の國民に對して元寇當時の朝野上下、僧俗、男女が擧國一致よく國難に處した意氣を想起せしめるの料ともなり、又稀覯の史料が原形を髣髴しつゝ廣く世に親まれんことを希ふに外ならぬ」と記されし序文がよくその趣旨を盡してゐる。(同所發行、卷子本二卷、解說附、貳圓五拾錢)

「唯一神道名法要集」が我國思想史上或は神道史上有する意義は更めて說く迄もないが、唯一神道に關する雜事を問答體に記せしもので、室町時代の後半期に一つの組織を以て成された吉田家の唯一神道の學說を詳述し、吉田兼倶の思想信仰のみならず、近世の思想史研究の上にも重要なる述作である。

今迄世に出でし刊本は僅に續群書類從神祇部に收められし位で、本書は同所研究囑託河野省三博士の所藏に係る快尊本を複製し、同博士の解說を附せるもので、快尊本とは吉田兼倶の門人たる快尊が、兼倶自筆本から寫せるものと推定され、原形を忠實に殘せる古寫本として推稱されてゐる。兎に角室町時代を背景として國民精神の自覺、日本精神の展開といふ點から極めて注意すべき典籍であり、先の元寇史料集と併せてその刊行の意義をよく理解する事が出來る。(同所發行、册子本一册、解說附、壹圓)

○尊經閣叢刊赤穗義人錄

育德財團

赤穗義人錄は元祿十五年の赤穗浪士の復讐に就いて、當時是非の議甲論乙駁の間にあり、近世の碩儒室鳩巢が、その義舉たる事を唱道せる述作である。而して本書は實に前田侯爵家所藏の鳩巢草稿本を複製せるものである。

室鳩巢は年十四にして前田侯に召され、その後京都遊學を終へて貞享三年加賀に歸り、正德元年新井白石の推擧に依りて幕府の儒者に任ずる迄、儒を以て前田家に仕へたのであるが、赤穗義人錄は正にその間、元祿十六年十月の撰に係る。その內容は元祿十四年勅使下向の事より同十六年二月諸士切腹の顚末を記し、更に四十六士の傳、並に附載として寺坂吉右衞門信行及び節母義僕の事蹟に至る迄、簡潔なる叙述の間に修飾せざる史實を傳ふるものと言ふべきである。また更に本書にありては鳩巢草稿本の複製なるが故に改竄是正せる過程を偲び得ると共に、彼が拂へる苦心經營の樣を窺知し得る點にその意義大なるものがあるのである。（解說附和本二册帙入）

（以上時野谷）

○稻荷神社史料　第五輯

伏見の稱荷神社に於ては夙くより神社史料の蒐集整理に力を致されてゐたが、此度その神階及社格、並に社領に關する部分がまづ公にせらるゝに至つた。本史料の編纂は辻善之助博士監修の下に始め史料編纂所竹島寬氏之に當り、その他に轉ぜらるゝに及んで同所小島鉦作氏專らその後を繼ぎ之を完成せられしもの、その最初に第五輯の出版せらるゝに至つたのはもとより編纂事業進捗上の事情によることであらうが、特に一般國史の問題にも關係するところの多いこの一編のまづ完成したことは、われ〳〵として殊に喜びとするところである。

就いて見るに神階及社格に關する條項は全七三六頁の中僅々六六頁に過ぎず、他は悉く社領に關するものであるが、本編は更に封戶、莊園、神田、朱印地の四項に分たれ、各項に就て逐一編年的に關係史料の全文が揭げられてゐる。挿入の圖版十三葉、別に卷末に舊稻荷村附近之圖